

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2025.09.30

NO.43

- 理事長より「生徒指導提要と学校教育相談」理事長：築瀬のり子
- 令和7年度栃木県支部総会報告
- カウンセリング特別講座Ⅰ「子どもの自立に向けて大人はどう構えるのか」
講師：まこと幼稚園理事長・園長、宇都宮大学客員教授 山村達夫 氏
- 日本学校教育相談学会第37回総会（オンライン）報告
- 日本学校教育相談学会第37回研究大会（京都大会）レポート
- 第45回支部研究発表会 コメンテーター：佐藤幹生 氏
- 第18回とちぎ教育相談カフェ「応答演習」 講師：栃木県支部理事長 築瀬のり子 氏
- 栃木県支部事務局からのお知らせ

○ 理事長より「生徒指導提要と学校教育相談」 築瀬 のり子

連日の暑さに、「酷暑や猛暑が当たり前になって、これ以上の暑さになったら何と表現するのだろう」などと他愛もない話をしているところに、前年度まで長らく支部理事をされていた小柳義一先生から、相談室だより秋号が届きました。小柳先生は慶翁寺こころの相談室でカウンセラーをなさっており、年に4回相談だよりを発行されて支部事務局にも送ってくださいます。そこに秋の歌が三首載っていました。その一つに、長塚節の



「馬追虫（うまおひ）の髭のそよにくる秋はまなこを閉じて想いを見るべし」
〈馬追（うまおひ：スイッチョ）の髭のようにそっと忍び寄ってくる秋は目を閉じそっと思い味わうべきであります〉（小柳先生訳）がありました。風情、情緒を感じる細やかな感性を、酷暑にも猛暑にもめげずもっていたいものだと思います。

話は変わりますが、『生徒指導提要』（改訂版）（以下『提要』と表記）をお読みにになりましたか。

「発達支持的生徒指導では、日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び、授業や行事等を通した個と集団への働きかけが大切になります。例えば、自己理解力や自己効力感、コミュニケーション力、他者理解力、思いやり、共感性、人間関係形成力、協働性、目標達成力、課題解決力などを含む社会的資質・能力の育成や、自己の将来をデザインするキャリア教育など…」(P20)と読み進め、「そう、これこれ!」と、私は小躍りする感覚だったのを今も覚えています。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、そうだったのです。それは、目指してきた、そして、目指している“学校教育相談”の理念や主張が明記されていると感じたからでした。元会長の栗原慎二先生は「私は、教育相談にかかわる者たちがこれまで追い求めてきた「教育相談ベースの生徒指導」に国が舵を切ったと感じました。」（『学校教育相談 理論と実践のガイドブック』P16）と書いておられます。

日本学校教育相談学会では、学校教育相談とは「教師が児童生徒最優先の姿勢に徹し、児童生徒の健全な成長・発達を目指し、的確に指導・支援すること」と定義し、3つの理念「児童生徒最優先の姿勢に徹する」「児童生徒一人一人に目を向ける」「児童生徒理解の格段の深化を図る」を掲げ、児童生徒の成長発達を重視し3つの領域「学業的発達」「キャリア的発達」「個人的・社会的発達」の統合的発達をめざしています。また、学校教育相談は3つの機能「開発的教育相談」「予防的教育相談」「問題解決的教育相談」を含み偏りなく重視しています。これは『提要』で示された3類（課題性の高低からの分類）の「発達支持的生徒指導」「課題予防的生徒指導」「困難課題対応的生徒指導」とも重なります。さらに、『提要』P16には教育相談は「生徒指導の一環として位置付けられるものであり、その中心的役割を担うもの」と明記されています。

学校教育相談の理念や目的を再度確認し、様々な理論や技法、事例研究などの研修を継続し、「学びを実践に活かし実践を通して学びの実をあげる」これを積み重ねたいものです。学校教育相談を軸にした日々の教育実践が、今求められているのだと思います。

事務局からの案内（P8参照）にもありますが、『生徒指導提要』改定を中心となって進められた八並光俊先生の講演会を11月22日（土）の午後に開催しますので、是非、ご参加ください。

○ 令和7年度栃木県支部総会報告

令和7年6月7日(土)、教育会館大ホールにて、令和7年度の支部総会が開催されました。佐藤理事の議事進行により、令和6年度事業報告・決算報告、令和7年度の事業計画・予算案などが滞りなく可決されました。詳細につきましては、支部からの関係資料を送付させていただきました。

【議事】

1. 令和6年度事業報告
2. 令和6年度決算報告
3. 会計監査報告
4. 令和7年度事業計画案
5. 令和7年度予算案
6. その他 役員改選

(文責：井野 維子)

○ カウンセリング特別講座Ⅰ「子どもの自立に向けて大人はどう構えるのか」

まこと幼稚園理事長・園長、宇都宮大学客員教授 山村 達夫 氏

講演を拝聴して、子どもの自立とは、子どもの意識の成長を指していると思いました。自立した人間に成長することは、自立した意識をもつこと、その場合、子どもの意識がどのように作られていくかが問題になります。

意識の作られ方を山村先生は、子どもと関係する他者、子どもをとりまく文化環境・自然環境との関係性で説明されました。子どもは「様々な関係の中で生き、成長し、体験を記憶する、記憶した体験でまた新しい体験を意味づける」このようなことの繰り返しの中で、子どもの意識が作られ、子どもは自分の人生に意味を持たせるようです。

講演の中で山村先生が紹介されたヴィクトール・フランクルの言葉に、「私が人生に何を求めているかではなく、人生が私に何を求めているかだ」との一節がありました。どのような境遇でも、人生にどんな意味を見出すかは本人次第であるという言葉だと思いました。

子どもたちから、「自分の人生を肯定させる力」を紡ぎ出すことが、大人の責任になるようです。山村先生は、子どもを取り巻く多層的な支援の必要性をお話しされました。学校・家庭・地域さまざまな関係が重なり合うことで、子どもの経験は豊かになります。フリースクールや相談室が居場所として大切な理由もここにあると思いました。

山村先生の実践には、様々な学術理論が背景にあり、実践を通して理論を更新されている様子が観えました。子どもと関わる仕事の責任とやり甲斐を新たにした時間でした。

(文責：原沢 大生未)

○ 日本学校教育相談学会第37回総会（オンライン）報告

7月19日(土)の午後、オンラインで総会が開催されました。これまで総会は研究大会と抱き合わせによりコロナ禍を除いて対面で開催されてきましたが、学会の運営改善の一環で、今後は7月に通常オンラインで開催されることになりました。研究大会開催地に向かなくても、ネット環境さえあれば、参加しやすくなりました。もう1つの利点としては、2日間開催の研究大会の日程にゆとりができ、内容を充実させることができます。

今年度は夏季ワークショップも研究大会とは離れた別日で、オンラインによる開催ですが、これも来年以降、見直しや改善が図られるものと思われます。ちなみに、オンラインが続いていた1月の中央研修会(令和8年1月10日・11日)は、今年度から対面に戻ります。会場は以前のオリンピック記念青少年総合センターではなく、埼玉県越谷市の文教大学です。詳細は、本部メルマガや会報、学会ホームページをご確認ください。

さて、本題の総会についてです。令和6年度事業報告・決算報告、令和7年度予算案・事業計画案、新役員の承認などが議決されました。主要な点をご報告させていただきます。

まず、今年度は役員改選の年になり、しかも春日井敏之会長が退任となり、それに伴って大幅な入れ替えがありました。本部役員は以下のとおりです。

会 長	児玉 有子 (青森県支部)		
副会長	藤井 和郎 (岡山県支部)	中林 浩子 (広島県支部)	木村 正男 (岐阜県支部)
事務局長	米田 成 (広島県支部)		
事務局次長	古谷 雄作 (兵庫県支部)	藤坂 雄一 (宮城県支部)	

このほか、大半の専門委員会委員長(全国理事)は留任となりましたが、認定委員長の荒井明子氏のみが新たに選出されました。

栃木県支部では、築瀬のり子理事長が認定委員長(全国理事)の任期を終えられ、退任されました。理事の松本は、引き続き広報委員長(全国理事)を務めさせていただきます。また、伊澤裕理事が認定委員に、小谷野早苗新理事が

広報委員に、今秋承認されることになり、活躍が期待されます。

ほかに名誉会員の推薦があり、近隣である埼玉県支部の柴崎武宏先生と相馬誠一先生が名誉会員になることが承認されました。

今年度の京都大会に続いて、令和8年度の研究大会広島大会が決定されました。さらに、今後、沖縄の慰霊の日（6月23日）、広島・長崎の原爆の日（8月6日・9日）には、研究大会や役員会など、全国規模の学会行事を計画しないことが確認されました。したがって、広島大会は、8月上旬ではなく下旬の土日（8月22日・23日広島市開催）で準備が進むことになります。

最後になりましたが、2期4年会長を務められた春日井敏之前会長、大変お疲れ様でした。栗原元会長に続いて、改善や新規取り組みのビジョンを任期ごとに示され、リーダーシップを発揮し、本部事務局や各専門員会を動かし、本学会の発展に寄与されました。ありがとうございました。

（文責：松本 直美）

○ 日本学校教育相談学会第37回研究大会（京都大会）レポート
（8月9日・10日）

記念講演と実践事例発表のレポート 報告者 佐藤 幹雄

記念講演「多職種連携・協働によるチーム学校」

野田 正人 氏（立命館大学名誉教授・国立教育政策研究所フェロー・SSW 情報研修センター代表理事）

- 野田先生は、最初に「SC30年 SSW17年で考える 問題の所在と解法」というテーマでお話をはじめられた。
- ・要保護児童対策地域協議会の多職種談義の難しさについて
 - ・アセスメントの持つ意味
 - ・アセスメントの難しさを乗り越えて
- 「教育相談の基本姿勢と体制」理解なき指導はあり得ない）についてお話なされた。大切だと思う点を列挙したい。
- ①指導や援助の在り方を教職員の価値観や信念から考えるのではなく、児童生徒理解（アセスメント）に基づいて考えること。
- ②児童生徒の状態が変われば指導・援助方法も変わることから、あらゆる場面に通用する指導や援助や援助の方法は存在しないことを理解し、柔軟な働きかけを目指すこと。
- ③どの段階でどのような指導・援助が必要かという時間的視点を持つこと。（発達の視点）→生育歴の把握……発達の視点。

学校が取り組む組織的な支援

仕分け・スクリーニング（学校が体制を組む）→見たて・アセスメント（精度の高い情報分析。専門職の活用とチーム体制）→手立て・プランニング（アセスメントに基づいて）…以上のことは教育相談コーディネーターがチームの要として果たす役割が重要とおっしゃった。

生徒指導提要のいうアセスメントはBPSで行う、児童生徒の課題を「生物学的要因」（発達特性、病気等）「心理学的要因」（認知、感情、信念、ストレス、パーソナリティ等）「社会的要因」（家庭や学校の環境や人間関係等）から実態を把握すると同時に、児童生徒自身のよさ、長所、可能性等の自助資源と、課題解決に役立つ人や機関・団体等の支援資源を探る。との説明あり。…私が最も注目したのは、アセスメントの具体的な組み立て方についてのお話である。

アセスメント1 情報を集める…学校情報の宝庫→例、発達課題を見るには過去の情報から、就学前からの要録の活用など。

アセスメント2 情報を整理してみる…整理の枠組みとして

- ・愛着、発達、貧困、虐待、親子関係、学力…。いろいろだけど、バイアスとなることもある。（発達障害という言葉ですべて分かったように気になる教師がいるのでは。それは時に偏見となることも、と常日頃筆者は感じている）そこでBPSモデル。

アセスメント3 アセスメントの本質……アセスメントは、できたかできないか、の二択ではない。少しずつでも進める（漸進）することで、効果的な指導選択ができる。※K-BPSシート（ウラガミ様の利用）に記入する。

K	B
P	S
A	P

K 気になることや主訴を書く。

B 生物…身体、病気、発達など。

P 心理…認知、能力、意欲、行動など。

S 社会…主として家庭や地域。

A アセスメント…生徒の困りの本質。

P プランニング（下段）…何をするか、特にAに基づいて取り組む。

○K、Bは箇条書きで的確に。Aは複数で話し合いたい。

◎先生はKからP（下段の）にとびつきやすい。しかし、なぜKが起きているかを考えなくてはならない。

◎効果的な活用例「なんで～か♪」を考えると声かけが変わる。（抜粋）

- ・Aを把握するため、生徒への指導より、問いかけが増えた。

- ・生徒との会話が増えた。

- ・同僚とも、愚痴や批判のやりとりがなくなり、KBPSの情報交換と、Aについての会話「なんで～か♪」の回答を求めるやりとりが増えた。

- ・結果、不登校より、問題行動が先に減少…アセスメントが容易に。最後は不登校も減少。学力が向上…。

○アセスメントと個人情報（抜粋）

- ・守秘義務は当然だが、正しい活用と管理が必要で、「守秘が先ではない」→要保護児童と児童虐待については通告義務が職務であり、言わないのが違法。→通告した事実を当事者に回答する必要はない。

○アセスメントに基づいた、プランニング（抜粋）

- ・役割分担の明確化（誰がやるのか）…支援を行うのは、学校単独か、外部連携か？外部につなぐなら、機能と法令と連携方法を吟味し、誰が何をするのかを定め、学校としての意思決定を行う。そのための、関連制度と連携先についての情報が必要。→効果検証と再アセスメントにつなげる。

以上、特にアセスメントに関してはとても分かりやすく明日からの教育活動に生かせる内容だったと納得できる中身の濃い講演でした。

実践事例研究発表（13）「児童のよりよい人間関係を育てる学級経営」—PBISとSSTを活用して—

発表者 山形市立出羽小学校 片山 亜紀子 氏

「問題と目的」項では、「小1プロブレム」の問題を取り上げているが、人間関係を構築できず集団生活になじめない児童が増加している中、新型コロナウイルスの流行で、それまで生活の潤滑油となっていた「無駄話」や「遊び」が自由にできなくなり、孤立感を感じるようになった、ことを指摘。

園や学校で人との接触に制限があった時期を数年にわたって経験したため、集団生活の中でうまくコミュニケーションをとることができない場面が多く見られ、学校での対策が必要になっていることを目的として掲げている。

最初に、PBIS（Positive Behavioral Interventions）について簡単に説明したい。米国で開発された行動面へのアプローチで、応用行動分析、予防アプローチ、ポジティブな行動支援が基盤となっている。PBISの目的は、…すべての児童生徒が学業や行動でも最大限の成果が期待できるように支援することである。従来の指導のように、個別の児童生徒をどう変えるかに注目するのではなく、応用行動分析の考えに即しながら、問題行動の減少のために教師のアプローチや学校環境をどう変えるかに焦点を置く。PBISを実践するポイントとして、価値を明確にすること、価値に基づいた行動を具現化すること、良い行動が生じる仕掛けや場を考えること、価値に関連付けて即時に強化することの4点があげられる。（太字は筆者）

次に、SSTの目的と実践ポイントに触れている。学校教育でのSSTの目的は、対人関係を円滑に築き維持するためのスベヤコツを身につけることである。実践するポイントは、クラスルームワイドやスクールワイドで学ぶこと、必要に応じてスモールグループで学ぶこと、生活場面の中でモデリングを通して学ぶことの3点がある。

実践内容

（1）PBISを軸にした学級目標

①価値を明確にした学級目標の設定 ②学級目標をもとにした生活場面別チャート

③トークンエコノミー…（特にトークンエコノミーについて触れたい。）

…教師が主体となり、児童がよい行動をしたとき、トークン（児童にとって価値あるもの）を与え、よい行動の生成頻度を高めることを目指すトークンエコノミーを活用した。（とある）（その結果）…児童間でよい行動をしている友達を見つけて、相互によさを認め合えるようになった。…中には友達からのメッセージを見て、自分のよさを発見することができた児童もいた。（とある）…よい行動を紙に書くことが動機付けとなり、思っていることを相手に伝えることができるようになった児童も多く、…。

（2）SSTを生かした特別活動

①SSTの計画…ターゲットスキルを19個設定し、45分間のロングモジュールが7回、15分間のショートモジュールを12回設定した。

②SSTの実践では、望ましいスキルを身につけるためのロールプレイングを二人組で行い、SSTを通して学んだ対人関係を円滑に維持するための具体的な行動について、児童から出た言葉を毎時間授業の最後にまとめた。

(3) かかわりを大切に学習活動

①ペア学習を軸にした学習→これまで学習したソーシャルスキルを学習活動の中で活用できるようにするために、意図的にペア学習を設定した。例 国語の時間に互いに音読を聞いて感想を述べ合う。体育のかけっこの学習でも…「がんばれ」以外の言葉を友達にかけることができた。

②グループ学習で見られた変容（省略）。

発表者の考察

PBIS と SST の実践により、Q-U アンケートの学級満足度が 19% 増加し、「クラスの仲の良い友達がいますか」「クラスにはいろいろなことに進んで取り組む人がいますか」「クラスのみんなといろいろな事をするのは楽しいですか」の平均点 3.85 点以上となった。このことから、ルールの確立がやや低い集団からルールとリレーション（役割交流だけでなく感情交流も含まれた親和的な人間関係）が同時に確立した集団へと変容したことが示唆された。PBIS の取り組みを通して児童が具体的な行動チャートを理解して行動することができるようになり、望ましい行動が増加したと推測する。さらに計画的な SST の取り組みにより、友達との関わり方を身につけたことがリレーションの形成につながったのではないかと考える。（中略）

さらに、**児童の望ましい行動を強化するためのトークンエコノミーが非常に有効であった**。教師と児童の間での取り組みからスタートしたが、児童間で互いの好ましい行動を賞賛し合ったことで、よりよい人間関係が形成されたと考える。以下、略。

筆者の感想

これは単なる学級経営の技法の発表では決してない。PBIS と SST を一つの哲学のように自分のものにし、子どもたちへの愛情と教育への情熱から様々なアイディアを生み出し、子どもたちの変容を導き出した実践の発表である。私は片山先生の実際の授業を見学させていただきたいと切に願うようになった。片山先生は終始笑顔であった。どんな質問にも笑顔で真摯に答える姿が印象的であり、発表時の声もとても柔らかく慈愛に満ちたものであった。このような先生が担任の先生なら子どもたちも毎日、学校に来たくなるだろうな、と感動さえ覚えた発表であった。

自主シンポジウムレポート 報告者 伊澤 孝

今回の京都大会では、1 つだけでしたが栃木県支部のメンバーによる自主シンポジウムが開催されました。

自主シンポジウム3「グループカウンセリングを活用した学級の仲間づくり（5）」

企画者：松本 直美（壬生町教育支援センター・文教大学） 伊澤 孝（壬生町教育支援センター・栃木県 SC）

司会者：松本 直美（壬生町教育支援センター・文教大学）

指定討論者：瓦井 千尋（壬生町教育支援センター・元宇都宮大学教職センター教授）

話題提供者：黒須 瞳（壬生町公立小学校）

瀬端 成基（壬生町公立小学校）

齋川 由香（壬生町公立小学校）

増淵 彩乃（壬生町公立小学校）

松本・伊澤の両理事によるグループカウンセリングに関する自主シンポも京都で5回目となりました。今回は、指定討論を瓦井千尋先生（元宇都宮大学教職センター教授、元総合教育センター所長・元県教育次長）にお願いしての企画でした。以下、話題提供された先生方の感想です。

壬生町公立小学校 黒須 瞳

「『やんちゃ系男子』と『コミュニケーションが苦手な女子』、両者の関係性を改善し、学級の雰囲気をよくしたい」という思いで、対人関係ゲームをひとつの軸として学級経営を行ってきました。昨年度は、一昨年前のビギナー・チャレンジから、「対人関係ゲーム・プログラム」へのステップアップを意識しました。目標に向かって意図的にゲームを選び、児童の実態を観察して次の活動に向かうことで、効果的な取り組みとなったと感じています。京都大会は、1 年間の取り組みを振り返るよい機会となりました。また、指定討論者の瓦井先生から、「生徒指導提要で言われていることが、実践に繋がっている」と仰っていただいたことが自信になりました。1 年に1度、自分の学級経営を振り返る時間をもつことが、次へのステップへの動機付けにもなっています。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

壬生町公立小学校 瀬端 成基

昨年度担任した学級における、学習規律の定着から児童同士のつながりづくりをねらった対人関係ゲームの実践について発表させていただきました。発表に当たって実践を振り返ってみると、うまくいかなかったことももちろんありましたが、それ以上に児童の反応から多くのことを学ばせていただいた1年間であったことに気付かされました。対人関係ゲームは、児童同士のつながりを深めることはもちろん、教師が児童と笑顔を共有し、児童の視点で教室を捉えるためにも有効なツールであると、改めて感じました。今回このような貴重な学びの場をいただいたことに、感

謝申し上げます。

壬生町公立小学校 増淵 彩乃

今年度初めて大会に参加させて頂きました。参加された先生方が児童の未来を真剣に考え、熱心実践されている姿に感銘を受けました。今回の発表にあたって研究した「特別支援学級と交流学級の連携」では、対人関係ゲームを通じた児童の成長を実感でき、今後の教員生活に大きな自信となりました。この貴重な経験を活かし、さらなる実践を深めていきたいと考えています。このような機会をいただき、心から感謝申し上げます。

壬生町公立小学校 齋川 由香

前年度発表させて頂いた実践からの課題として、小集団でできた遊びやゲームを交流学級の活動にどのように活かしていくかと、大きな集団での活動を通してスキルや社会性の獲得を効果的に促していく方策について、今年度の実践として取り組んできました。京都大会では、前年度参加してくださった方が今年度もいらしてくださり、1年間対人関係ゲームを実践してのご質問をいただき、本当に嬉しく思いました。有難うございました。

筆者の感想

フロアの皆様からも多くの感想をいただき、内容の濃い討論ができました。

ところで、栃木県支部からの参加、全体の参加者の減少を、年々肌で感じてしまいます。

会員それぞれが、特に学校カウンセラーの資格を持つ方は、各々の得意領域を生かし、多くの新しい仲間を学校教育相談の学びの場（学会の研修会や大会等）に誘っていければという思いが募っています。



○ 第18回とちぎ教育相談カフェ「応答演習」（8月2日）

18回目となる「とちぎ教育相談カフェ」が、支部理事長の築瀬のり子先生を講師に、「応答演習」をテーマに開催されました。教育相談カフェは、会員以外も対象に、教育相談について気軽に学んでもらい、興味をもってもらいとともに、入会のきっかけになればと、企画され、開催されてきました。

今回の参加者の感想を紹介します。

黒須 瞳（学会員・小学校教諭）

教育相談期間中、他の先生方がどのような教育相談を展開しているのかを知る機会はありません。スキルアップを目指し、ちょっと勇気を出して教育相談カフェに初めて参加させて頂きました。正直なところ少し緊張していたのですが、はじめにウォーミングアップで参加者の皆さんと気軽に話すことができ、安心して活動に参加することができました。



次に、応答技法について学びました。カウンセラーが「温もりのある」「曇りのない敏感な鏡」であることで、効果的なカウンセリングになると学びました。その上で行った紙上演習で感じたことは、「自分の鏡に映った言葉を正確に伝えること」は難しいということです。数多ある感情を、的確に言葉で表現するには、私には語彙が足りませんでした。光村図書出版の国語の教科書巻末付録に、「言葉の宝箱」という紙面があり、心情を表す言葉が多数掲載されています。「今、手元にあれば…」ともどかしく思いながら、これから子どもたちとともに語彙を増やしていこうと心に決めました。

最後の応答演習で感じたことは、「教師がトラブルの対処をするときの聞き方」が自分の体に染みついているということでした。「相談者の悩みの種となっている『A君』を指導しなくては」、という気持ちが強くなり、「いつから続いているの?」「具体的に何があったの?」と、「閉じられた質問」を連発してしまいました。また、相談者の発言を遮ってしまう場面もありました。これでは相談者の自発性を損ねてしまうと分かりつつも、なかなか修正できません

した。

相談者と相互にフィードバックができるように、リフレクションや質問の表現の幅を増やすとともに、語彙力を磨いていきたいと思います。

次回、第19回とちぎ教育相談カフェは、支部理事の馬場友治先生（学校カウンセラーSV）を講師に、「子どもの可塑性と少年犯罪」というテーマで開催されます。10月11日（土）13:30開会、会場はとちぎ青少年センターです。奮ってご参加ください。

（担当：松本 直美）

○ 第45回支部研究発表会（9月13日）

発表者 真岡市教育委員会教育相談員 三田 紀代美 氏

発表内容 「母子分離が難しい児童の対応について」

コメンテーター 支部理事 佐藤 幹雄 氏

研究発表会は、支部活動を支える重要な研修です。

そこでは、さまざまな事例をもとに、参加者が自らの学びと経験から、質疑応答や感想などを述べ合い、事例の理解を深めるとともに、教育相談に携わる者としての見識を高める学びが展開します。

過日行われた、第45回研究発表会でも、「母子分離が難しい児童の対応について」と題して問題提起がありました。質疑応答とさまざまな視点からの感想は、教育相談の実践を踏まえたもので、大変密度が濃く、勉強になりました。

最後に、コメンテーターの佐藤先生からの総括は、事例を学術的にブラッシュ・アップし、発表された方にも深い示唆を与えることになりました。

少人数でざっくばらんな雰囲気の家でしたが、発表者の方のご苦勞へのねぎらいと、事例となったお子様・ご家族の幸せの実現を、参加者皆で真剣に考えることができました。発表者の方、参加者の皆様、ありがとうございました。

（文責：原沢 大生未）



○ 栃木県支部事務局からのお知らせ

今年度後半の事業についてご案内いたします。(☆印の事業はすでに事務局にて参加受付をいたしております)

☆ 第19回とちぎ教育相談カフェ

相談学会スーパーバイザーであり保護司としてもご活躍中の馬場友治先生より、学校現場ではなかなか知ることができない貴重なお話がうかがえる機会になることと思います。少年犯罪についての理解を深めるとともに、学校現場で出会う児童生徒のさまざまな問題行動対応についてのヒントも得られるのではないかと思います。

☆ 第46回支部研究発表会

例年、会員の皆様に日頃の実践や研究を発表していただく貴重な場となっており、これまで学校カウンセラーの資格取得前にご発表いただいた方も多数いらっしゃいます。発表者だけでなく参加者としてのご参加もお待ちしております。

☆ 北関東・山梨ブロック研修会

北関東・山梨ブロック各県の会員にもご案内する本研修会に、諸富祥彦先生をお招きすることになりました。「不登校の初発対応」という重要かつ今日的関心の高いテーマでご講演いただく予定です。

***申し込み方法は別紙をご参照ください。**

開催期日	事業名	会場	備考
10月11日(土) 13:30～16:00	【第19回 とちぎ教育相談カフェ】 「こどもの可塑性と少年犯罪」 チューター：馬場友治氏（相談学会SV）	青少年センター	参加費 1,000円
11月1日(土) 9:00～12:00 13:30～16:00	【支部認定委員会】 【第46回支部研究発表】 コメンテーター：柴 一彌（相談学会支部理事）	青少年センター	発表者 募集
11月22日(土) 13:30～16:00	【カウンセリング特別講座Ⅱ】 演題：「発達支持的生徒指導の推進と教育相談の役割」 講師：八並光俊氏（東京理科大学名誉教授）	教育会館 大ホール	参加費 無料
令和8年1月 10日(土)・11 日(日)	【日本学校教育相談学会 第36回中央研修会】 ※6年ぶりに、対面での開催になります。詳しくは、学会本部のホームページやメルマガ等でご確認ください。	文教大学 (埼玉県 越谷市)	
令和8年 2月7日(土) 13:30～16:00	【精神医学特別講座】 演題：「思春期の精神的問題の理解と対応・支援」 講師：衛藤進吉氏（上都賀総合病院認知症疾患医療センター長、精神科医）	教育会館 大ホール	参加費 無料
令和8年 2月28日(土) 13:30～16:00	【北関東・山梨ブロック研修会】 演題：「不登校の初発対応」 講師：諸富祥彦氏（明治大学文学部教授、臨床心理士）	教育会館 小ホール	参加費 会員：2000 円 一般：3000 円

ニューズレター No.43、No.44 発行予定

【日本学校教育相談学会栃木県支部】

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館 栃木県連合教育会教育事業部（教育相談）

日本学校教育相談学会栃木県支部事務局 永井伸和・佐藤佳子

TEL 028-627-5682 FAX 028-627-5682

E-Mail : jasc.tochigi@gmail.com

ホームページ : <http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html> (会員の広場パスワード tb-jascg3123)

発行責任者 築瀬のり子

広報担当者 松本直美・佐藤幹雄・馬場友治・原沢大生未・平峰孝二・小谷野早苗